

LCAF 初級検定第 4 回試験問題

注意 難易度を★で表しています。 ★：易（正答率：90%以上、★★：難度低（正答率：75%～90%）、★★★：難度中（正答率：60%～75%）、★★★★：難度高（正答率：60%未満）

№	試験問題
1	<p>Q1（難易度：★） <CO₂問題 「カーボンニュートラル」と「カーボンオフセット」> 以下の「カーボンオフセット」の説明の中で、適切なものを選択せよ。</p> <p>(a) 炭素に価格を付け、排出者の行動を変容させる政策手法。 (b) 自分でどうしても避けることができない排出量を、他者が削減した量を買収することなどで相殺する方法。 (c) LCA を用いて計算したライフサイクル全体での温室効果ガスの排出量を表示する方法。 (d) 水素自動車のように使用段階で温室効果ガスを排出しない製品または技術のこと。 (e) バイオマスを燃焼しても固定化された大気中の CO₂ が再び大気中に戻るだけなので、新たな CO₂ の排出量として計上しないという考え方。</p>
2	<p>Q2（難易度：★★） <4つのフェーズ> ISO14040:2006 における LCA の4つのフェーズに関する以下の記述の中で、適切なものを選択せよ。</p> <p>(a) LCA は4つのフェーズを反復して実施するが、「目的及び調査範囲の設定」で最初に設定したことは、以降の LCA 調査の全体を通じて維持しなければならない。 (b) 「インベントリ分析」では、常に「製品システム」のライフサイクル全体に渡る、環境への投入物及び排出物を算定する。 (c) 「影響評価」では、「製品システム」が環境へ与える実際の被害を算定しなければならない。 (d) 「クリティカルレビュー」では、LCA の実施目的が妥当であるかどうかを検証する。 (e) 「解釈」では、LCA の結果が調査の目的に合致しているかを精査し、結論として言えることを明確にする。</p>
3	<p>Q3（難易度：★★★★） <CO₂原単位> 以下の記述の中で、適切なものを選択せよ。</p> <p>(a) 素材の汎用製品の「資源採掘から製造までの CO₂ 排出量」のうち、通常一番大きいのは採掘工程である。 (b) 鉄製品の資源採掘から製造までの CO₂ 排出量は、主に水素が還元剤として用いられる。 (c) 化石燃料を原料とするプラスチック製品の資源採掘から製造までの CO₂ 排出量を分析すると、石油を海上輸送する時の CO₂ 排出量が大きな割合を占める。 (d) 銅鉱石は主に硫化物として採掘され、還元反応で SO₂ が排出される。 (e) バイオプラスチック製品はカーボンニュートラルとみなせるので、資源採取から製造までの CO₂ 排出量はほとんどゼロになる。</p>

4	<p>Q4 (難易度：★★) <比較主張> ISO14040:2006 における「一般開示を意図する比較主張」を実施する時の制約事項に関する以下の記述の中で、<u>適切なもの</u>を選択せよ。</p> <p>(a) インベントリ分析結果だけを用いなければならない。 (b) 製品バスケット法は使うことができない。 (c) 環境影響評価を行う必要はあるが、正規化は必須になっていない。 (d) 環境影響を重み付けし単一指標で示すことが望ましい。 (e) 利害関係者を含めたクリティカルレビューまでは実施しなくてもよい。</p>
5	<p>Q5 (難易度：★) <LCA の用語> 以下の用語の説明の中で、<u>不適切なもの</u>を選択せよ。</p> <p>(a) 「製品システム」は、対象とする製品のライフサイクルを構成するすべてのプロセスの集合体を言う。 (b) 「単位プロセス」は、製品システムに含まれるデータを収集する最小単位のプロセスを指す。 (c) 「システム境界」は、「製品システム」と自然界または「製品システムに含まれない他の製品システム」との境界を言う。 (d) 「基本フロー」は、定められた機能単位を実現するための製品のことを言う。 (e) 「機能単位」は、LCA で対象とする製品システムの「機能」を実現する物理的な量を言う。</p>
6	<p>Q6 (難易度：★★) <インベントリ分析 実施方法全般、カットオフなど> LCA の実施における「カットオフ」に関する以下の説明で、<u>不適切なもの</u>を選択せよ。</p> <p>(a) LCA 実施の目的に照らして影響が十分小さいことがわかっている工程は、LCA の実施から「カットオフ」することができるが、「カットオフ」したことを明示する必要がある。 (b) LCA の対象製品の素材や部品の重量を「カットオフ」の基準に用いる場合でも、単位重量あたりの環境負荷の大きな素材や部品が、「カットオフ」されないように注意する必要がある。 (c) LCA は、対象製品のライフサイクルに直接係わる環境負荷を算定するので、評価対象製品を製造するための設備や照明及び空調などの付帯設備は、全て「カットオフ」することができる。 (d) LCA の実務では、バックグラウンドデータが不明であることによる「カットオフ」を避けるために、性質が似ていて製造工程がほぼ同じ素材のバックグラウンドデータで代用することが行われる。 (e) LCA の実務では、インベントリ分析の計算過程で「カットオフ」された部品や素材の環境負荷を、「カットオフ」されていない部分の環境負荷と同等と仮定して、全体の環境負荷を算定することができる。</p>
7	<p>Q7 (難易度：★★★) <簡単なインベントリ分析の計算> ある工場で1日にポリエチレンを0.2トン成形し、部品Aと接合して製品Pを1日に50個製造している。この工場では、製品Pの製造に1日150kWhの電力を消費しそれ以外のユーティリティは使用していない。 以下の情報を用いて、製品Pの1個あたりのCO₂排出量を計算した場合、その結果として、<u>適切なもの</u>を選択せよ。</p>

(情報)

- ・製品 P には部品 A を 2 個使用する。
- ・ポリエチレンはすべて部品 A との接合に使われる。
- ・部品 A は別の工場で生産され、納入される。なお、納入の為の輸送の CO₂ 排出量は無視できる。
- ・部品 A を 100 個製造するためにはポリエチレン 100kg と電力 50kWh が必要である。
- ・ポリエチレンを 1kg 製造するまでの CO₂ 排出量（上流プロセス合算済み）は 0.60kg である。
- ・電力 1kWh の CO₂ 排出量（上流プロセス合算済み）は 0.40kg である。

- (a) 4.4kg-CO₂
- (b) 5.2kg-CO₂
- (c) 6.8kg-CO₂
- (d) 8.8kg-CO₂
- (e) 10.4kg-CO₂

Q8（難易度：★★★）

<インベントリ分析全般 バックグラウンドデータなど>

インベントリ分析に関する以下の記述の中で、不適切なものを選択せよ。

- (a) インベントリ分析とは、対象製品について、原材料・エネルギー（入力）や、生産または排出される製品・排出物（出力）のデータを収集し、環境負荷項目に関する入出力の明細一覧を作成することである。
- (b) 一つのプロセスから二つ以上の製品が生産されるように見える場合でも、プロセスを詳細に細分化すると、それぞれの製品が個別の単位プロセスで生産されていることが分かる場合は、配分を避けて単位プロセスのデータを作成することができる。
- (c) データ集約までの結果を踏まえ、システム境界の精査を行い、必ず最初に設定したシステム境界やカットオフ基準に合うように、データの追加収集等を行う。
- (d) インベントリ分析において、その結果に大きく寄与しないと考えられる部分は省いても良いが、省いた部分に相当する環境負荷を推定して補完することが必要になる。
- (e) 製品バスケット法は、LCA で製品を比較するときに、LCA の対象となっている製品と機能単位を同一にするために他の製品のデータを導入する方法である。

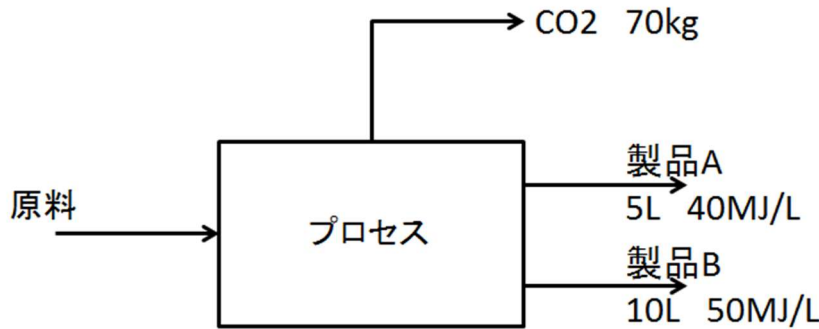
8

Q9（難易度：★★）

<配分の基礎：計算しない計算問題>

以下の図に示すように、ある原料から、5L の製品 A と 10L の製品 B を作っているプロセスで CO₂ 排出量が 70kg であった。製品 A の発熱量は 1L あたり 40MJ/L、製品 B の発熱量は 1L あたり 50MJ/L。発熱量基準で配分して、製品 A と製品 B の 1MJ 当たりの CO₂ 排出量を求めた場合、その結果として、適切なものを選択せよ。

9



- (a) 1MJ 当たりの A と B の CO₂ 排出量は同じである。
- (b) 1MJ 当たりの B の CO₂ 排出量は A のそのの 2 倍である。
- (c) 1MJ 当たりの A の CO₂ 排出量は B のそのの 0.5 倍である。
- (d) 1MJ 当たりの A の CO₂ 排出量は B のそのの 0.8 倍である。
- (e) 1MJ 当たりの B の CO₂ 排出量は A のそのの 1.2 倍である。

Q10 (難易度:★★)

<簡単な配分問題>

100kg のポリエチレンと 150kWh の電力を用い、製品 A を 20 個と、製品 B を 10 個製造するプロセスがある。製品 A は 1 個 2,000 円で、製品 B は 1 個 1,000 円で販売している。生産される製品の金額を基準に配分し、製品 A を 1 個生産するための CO₂ 排出量を計算した場合、その結果として、適切なものを選択せよ。

ただし、ポリエチレンを 1kg 製造するまでの CO₂ 排出量 (上流プロセス合算済み) は 0.60kg-CO₂、電力 1kWh の CO₂ 排出量 (上流プロセス合算済み) は 0.40kg-CO₂ とする。

- (a) 0.48kg-CO₂
- (b) 0.50kg-CO₂
- (c) 2.0kg-CO₂
- (d) 4.8kg-CO₂
- (e) 5.0 kg-CO₂

Q11 (難易度:★★★)

<リサイクル>

廃棄物から再生材料を製造するリサイクルをする場合と、そのリサイクルをしない場合との環境負荷について、LCA を用いて比較することに関する以下の記述の中で、適切なものを選択せよ。

ただし、廃棄物に至るまでの環境負荷はその上流工程で計上済みのため、ここでは対象外と考える。

- (a) 元の材料と全く同じ再生材料が得られる「水平リサイクル」では、再生材料を得るために必要な工程を加え、元の材料の使用量が少なくなるものとして評価できる。しかし、再生材料もいずれは廃棄されるので、リサイクルしない場合と比べ廃棄物の量は変わらない。
- (b) 再生材料が元の材料に戻らない「カスケードリサイクル」では、製造された再生材料もいずれは廃棄されるので、リサイクルする場合もしない場合も廃棄物の量は同じであると考えられることができる。
- (c) 再生材料が元の材料に戻らない「カスケードリサイクル」では、リサイクルしない場合に再生材料と同じ性質の材料を新品の原料から製造する場合を加えて評価する。

- (d) 「水平リサイクル」でも「カスケードリサイクル」でも、リサイクルせずに廃棄物を最終処分する場合の環境負荷と、廃棄物から再生材料を製造する場合の環境負荷を比べることで評価する。
- (e) 「水平リサイクル」でも「カスケードリサイクル」でも、リサイクルする場合の環境負荷からリサイクルしない場合の環境負荷を減算して、リサイクルする場合の環境負荷の削減を算定する。

Q12 (難易度：★★★)

<リサイクルのインベントリ分析>

ある工場で単純焼却されていたポリエチレン廃棄物をリサイクルしてポリエチレンの再生材料を製造することにした。以下の情報を用いて、このポリエチレン廃棄物を単純焼却していた時の CO₂ 排出量と、1kg のポリエチレン再生材料を製造する CO₂ 排出量とを計算した場合、その増減に関する記述の中で、適切なものを選択せよ。

ただし、製造される再生材料は、新品のポリエチレンと全く同じ性能であるとする。

(情報)

- ・ 1kg のポリエチレン廃棄物から収率 80% でポリエチレン再生材料ができる。このときに必要なエネルギーは 1kWh の電力だけであり、20% の残渣は単純焼却される。
- ・ 新品のポリエチレンを 1kg 製造するまでの CO₂ 排出量 (上流プロセス合算済み) は 0.6kg-CO₂ である。
- ・ 電力 1kWh の CO₂ 排出量 (上流プロセス合算済み) は 0.4kg-CO₂ である。
- ・ 1kg のポリエチレンの燃焼では 3kg-CO₂ の CO₂ が発生する。

- (a) 0.5kg-CO₂ の CO₂ 排出量が増加する。
- (b) 0.6kg-CO₂ の CO₂ 排出量が減少する。
- (c) 1.55kg-CO₂ の CO₂ 排出量が減少する。
- (d) 2.48kg-CO₂ の CO₂ 排出量が減少する。
- (e) 3.1kg-CO₂ の CO₂ 排出量が減少する。

Q13 (難易度：★★★)

<影響評価の一般的な方法と特性化係数>

ライフサイクルアセスメント (LCA) において地球温暖化 (気候変動) の環境影響領域 (影響カテゴリ) の評価が行われる時に使用される特性化係数に関する以下の記述の中で、適切なものを選択せよ。

- (a) IPCC の報告書で示される温室効果係数には、20 年係数、100 年係数、500 年係数がある。これらは、過去のそれぞれの年数で排出された温室効果ガスの世界全体の排出量が反映されている。
- (b) IPCC の報告書で示される温室効果係数は、世界のそれぞれの地域または国の今までの温室効果ガスの排出量が反映されている。
- (c) IPCC の報告書で示される温室効果係数は、排出地域によって異なるので注意が必要である。
- (d) IPCC の報告書で示される温室効果係数は科学に基づいて決められているので、IPCC の報告書の発行年次に係わらず一定である。
- (e) IPCC の報告書で示されているメタンの温室効果係数は、20 年係数より 500 年係数の方が小さい。これは、メタンの大気中での分解速度が CO₂ よりも早いためである。

Q14 (難易度：★)

＜特性化の計算＞

下表は、ある製品の温室効果ガスのインベントリ分析結果を示す。地球温暖化への影響の寄与に関する以下の記述の中で、適切なものを選択せよ。

ただし、1kg の CH₄、N₂O、CFC-11、HCFC-22 の温室効果係数はそれぞれ、25kg-CO₂eq、300kg-CO₂eq、5,000kg-CO₂eq、10,000kg-CO₂eq とする。

表 ある製品 1 個のライフサイクルでのインベントリ分析結果

基本フロー	排出量	単位
CO ₂	3.0	kg
CH ₄	0.3	kg
N ₂ O	8.0	g
CFC-11	0.5	g
HCFC-22	0.8	g

- (a) CO₂ の寄与が最も大きい
- (b) CH₄ の寄与が最も大きい。
- (c) N₂O の寄与が最も大きい。
- (d) CFC-11 の寄与が最も大きい。
- (e) HCFC-22 の寄与が最も大きい。

14

Q15 (難易度：★★)

＜重み付けの種類＞

多様な環境影響を総合的に判断するために、環境への影響を単一指標で表す方法が研究されている。その方法に関する記述について、不適切なものを選択せよ。

- (a) LIME では、環境への影響領域（影響カテゴリ）の重み付けに企業の主張を取り入れるパネル法を推奨している。
- (b) エコインディケータ 95 は、環境への影響領域（影響カテゴリ）ごとに点数を付け、それらを重み付けする方法である。
- (c) EPS は、環境への被害を金銭化して合算する方法である。
- (d) LIME で は、「人間健康」、「社会資産」、「生物多様性」、「一次生産」の 4 つの保護対象を取りまとめる重み付けが行われている。
- (e) エコポイント法は、インベントリ分析結果を使ったディスタンス トゥ ターゲット法（DtT 法）で重み付する方法である。

15

Q16 (難易度：★★★)

＜重み付けの注意＞

ISO14044:2006 に示されたライフサイクルアセスメント（LCA）の環境影響評価には、多様な環境影響を総合的に判断し単一指標で示す「重み付け」といわれる段階がある。この段階に関する以下の記述の中で、適切なものを選択せよ。

- (a) 特性化は影響領域ごとに基準となる物質が異なっている。それぞれの影響領域への影響を重み付けするためには、対象地域全体の排出量と比較する正規化を必ず実施する必要がある。
- (b) 多様な環境影響を総合的に判断する「重み付け」は実施が不可能であるので、ISO14044:2006 では、

16

	<p>実施を避けることが推奨されている。</p> <p>(c) 「重み付け」の方法の中で、インベントリ分析結果とその国家としての目標値を比較する「ディスタンス トウ ターゲット (distance to target)」と呼ばれる方法は、主観を避けることができる方法と考えられている。</p> <p>(d) 「特性化」は自然科学の方法を使って実施することができるので「必須要素」とされ、「重み付け」は、「重み付け係数」の決定に人の価値観を避けることが出来ないで「任意の要素」とされていると考えることができる。</p> <p>(e) 多様な環境影響を総合的に判断する「重み付け」は、消費者が製品を比較するときに有用であるので、ISO14044:2006 では一般に開示することを意図する比較主張で実施することが推奨されている。</p>
17	<p>Q17 (難易度：★★)</p> <p><ペイバックタイム></p> <p>バイオマス燃料とした発電機を製造するのに 2,000GJ の 1 次エネルギーを変換した電気エネルギーを消費した。これを運転し、年間で 200GJ の電気エネルギーを得るために、バイオマスエネルギーを年間で 2,000GJ 必要とした。バイオマスの燃焼をカーボンニュートラルとして扱い、この発電機の CO₂ ペイバックタイムを計算した場合、その結果について<u>適切なもの</u>を、以下の中から選択せよ。ただし、1 次エネルギーから電力への変換効率は 40%であった。</p> <p>(a) 0.5 年 (b) 1 年 (c) 2 年 (d) 4 年 (e) ペイバックしない。</p>
18	<p>Q18 (難易度：★)</p> <p><LCA の利用① 環境ラベル></p> <p>環境ラベルに関する以下の記述の中で、<u>適切なもの</u>を選択せよ。</p> <p>(a) タイプ I のエコラベルは、環境への影響が大きい製品の使用段階の環境負荷だけを評価するラベルである。 (b) タイプ I のエコラベルは、第三者が環境配慮型製品の判定基準を判定し認証するラベルである。 (c) タイプ III のエコラベルは、多様な環境負荷の中でも特に重要である GHG 排出量を表示するラベルである。 (d) 日本の「エコマーク」や「省エネルギーラベル」は、タイプ II のエコラベルである。 (e) タイプ II のエコラベルを実施する時には、誤解を生まないように政府機関に届け出ることが必要である。</p>
19	<p>Q19 (難易度：★★★★)</p> <p><LCA の利用② SCOPE3、リバウンド効果></p> <p>以下の記述の中で、<u>適切なもの</u>を選択せよ。</p> <p>(a) グリーン購入法では、国の省庁やそれに準じる機関にグリーン購入に努めることを求めている。 (b) Scope3 の算定では、CO₂ 排出量だけでなく、成層圏オゾン層の破壊物質である CFC-11 を含む全ての温室効果ガスの排出量を算定する必要がある。 (c) 2015 年に国連で定められた持続可能な開発目標 (SDGs)は、すべての国が環境問題に取り組むための</p>

17の目標を定めている。

(d) ESGは、持続可能性の3つの柱である「環境」、「社会」、「経済」の視点で企業の活動を評価する方法である。

(e) 環境に良い活動により得られる時間的または金銭的余裕を、他の活動に用いることで新たな環境負荷を生じることを「リバウンド効果」と言う。

20 Q20 (難易度：★★★)

<LCAの活用③ カーボンフットプリント、その他>

カーボンフットプリントに関する以下の記述の中で、適切なものを選択せよ。

(a) カーボンフットプリントは、対象製品のライフサイクルでのCO₂排出量を算定するものである。

(b) PCRが存在しない製品のカーボンフットプリントを算定する場合には、PCRの制定から始める必要がある。

(c) カーボンフットプリントは、消費者に温室効果ガスの排出量が少ない商品の選択を勧めることを目的としているので、製品の製造までの温室効果ガスの排出量を算定して示す。

(d) 食品のカーボンフットプリントでは、食品そのものの温室効果ガスの排出量を示すことが目的なので、一般的にはパッケージ等の包装材の温室効果ガスの排出量を含めない。

(e) 自動車や家電製品など使用段階の温室効果ガスの排出量が大きい製品のカーボンフットプリントでは使用段階だけに限定した温室効果ガスの排出量を表示しなければならない。